

● 第7回 仙台国際音楽 コンクール

正木 裕 美

「仙台国際音楽コンクール」は、仙台市が開府四百年を機に2001年から3年毎に開催している。2019年で7回目を数え、5月25日から6月30日まで、ピアノとヴァイオリンの各部門が開催された。コンクール最大の特徴として協奏曲を課題の中心に据えており、仙台フィルハーモニー管弦楽団や山形交響楽団のサポートのもと、今回で言えば出場者はピアノ部門で最大3曲、ヴァイオリン部門で4曲のソリストを務めたことになる。それだけ非常にタフな精神力と技量を求められるが、同時に出場者が口々に魅力のひとつとして挙げる点でもある。

先行するピアノ部門（5月25日～6月9日）では、審査委員長の野島稔ほか、マッティ・レカッリオや野平一郎など11名が審査にあたった。出場申し込みをした331名のうち、リサイタル形式の予選に挑んだのは予備審査（動画データまたはDVD）を通過した37名（辞退者を除く）。以降、セミファイナルで12名、ファイナルで6名が選抜され、ピアノ部門は韓国出身のチェ・ヒョンロクが制した。チェは出場当時ザルツブルク・モーツァルトウム大学で学ぶ25歳で、セミファイナルではベートーヴェンの協奏曲第4番を、またファイナルではモーツァルトの協奏曲K453とチャイコフスキーの協奏曲第1番を演奏。審査委員長の野島は「自分の音楽に対する信念、感覚がぶれずに舞台上で弾けるのが（彼の）才能」と評しており、予選から一貫して自身の音楽を表現するすべに秀でていた点が、優勝の決め手となった。

続く2位にはアメリカ出身のバロン・フェンウィック、3位にはロシア出身のダリア・バルホーメンコが入賞した。セミファイナルではベートーヴェンの2つの協奏曲課題から前者が第3番、後者は第4番を選択し、ファイナルは①モーツァルトの5曲と②ベートーヴェンやチャイコフスキーなどの16の協奏曲から各1曲、ともにチェと同じ選曲となった。フェンウィックは「東洋人にはこういうチャイコフスキーの弾き方はできない」と野島が評したように、非常に華やかでスケールの大きな音楽を構築。またバルホーメンコは手や腕を柔軟に使い、軽やか且つ丸みのある音色でモーツァルトを響かせた。

第4位は佐藤元洋、第5位は平間今日志郎、第6位はキム・ジュンヒョン（韓国）と日本・アジア勢が健闘した。総じてピアノ部門入賞者は高い表現力と技術力を併せ持ち、オーケストラとの協奏を楽しむ余裕も見られた。広上淳一と仙台フィルによる強力なサポートも出場者が度々口にしており、表現に没入できる所以となったに違いない。

続いてヴァイオリン部門は6月15日から30日まで行われ、審査委員長の堀米ゆず子ほか、堀正文やボリス・ベルキンら12名が審査にあたった。予選は①J・S・バッハの協奏曲第1、2番（指揮者なし）と②イザイの無伴奏ソナタ第3、5、6番から各1曲、セミファイナルはストラヴィンスキーとプロコフィエフの第1番、バルトークの第2番の各協奏曲から1曲と、後述するコン

サートマスターとしての課題、ファイナルでは①モーツァルトの5曲と②ベートーヴェンやチャイコフスキーなどの11曲から任意の協奏曲各1曲が課された。申し込みをした136名のうち、出場者は予備審査を通過した36名（辞退者を除く）。セミファイナルへは12名、ファイナルへは6名が駒を進めたが、開催史上初めて1位を出さず、最高位2位はシャノン・リー（アメリカ/カナダ）が受賞した。次いで3位に友滝真由、4位に北田千尋と日本勢が健闘。5位はイリアス・ダビッド・モンカド（ドイツ）、6位に荒井里桜とコー・ドンフィ（韓国）の2名が並んだ。

最高位を受賞したシャノン・リー（受賞時26歳）は、クリエヴァンド音楽院やカーティス音楽院に学び、その傍らコロンビア大学でコンピューター工学を学んだ経歴を持つ。特にセミファイナルでは、堀米が「私たちはこれで優勝は決まったと思っていた」と評するほど、リズム感と色彩感に富むバルトークの第2番で他を圧倒する演奏を響かせた。しかしファイナルのチャイコフスキーでスケールの大きさを表現しきれず、1位に至らなかった。3位の友滝真由はセミファイナルのプロコフィエフ、ファイナルのブラームスと音楽を丁寧な作り上げ、4位の北田千尋についてはやや不安定な部分が散見されたものの、堀米はセミファイナルのプロコフィエフを評価している。

なお、ヴァイオリン部門では、セミファイナルで新たにコンマスとしての審査が加えられた。課題はブラームスの交響曲第1番第2楽章と、R・シュトラウスの「ツァラトゥストラはこう語った」からソロ、トゥッティを含む各指定箇所。中には指揮者の高関がいながら弾き振りのような姿勢で挑む者もあり、意識の違いが歴然とする内容だった。

全体として、高いレベルを示したピアノ部門に対し、ヴァイオリン部門は同水準に達していなかったように思われる。両続きとは言い、ピッチが上ずったままの者も複数おり、またファイナルで課されたモーツァルトについては、もっと作品と向き合う余地があるだろう。ベルキンも指摘していたが、同時期に開催された3つの国際コンクールへ質の高いヴァイオリニストが分散してしまった可能性も、付記しておかねばならない。

しかし一方で、彼らが4曲もの協奏曲に取り組み、研鑽を積んできたのもまた事実。その努力に最大の賛辞を贈るとともに、この経験が出場者たちの糧となることを切に願っている。

最後に、関連事業について申し添えたい。同コンクールでは毎回、審査のほか、ホームステイやマスタークラス、次審査に進めなかった出場者による学校訪問コンサートなどを、ボランティアのサポートを得て複数行っている。審査に興味のある人に限らず幅広い層やニーズに対応しており、その盛況ぶりは、コンクールの広報面のみならず、音楽の裾野を広げる一助であることが伺い知れるものであった。